回復期リハビリテーション病棟における家族への直接指導の有用性 第2報

～ADL能力と介護負担感の関係～

野本 正仁[1)]　永田 旭[1)]　石森 卓矢[1)]　腰塚 洋介[1)]　風晴 俊之[2)]　美原 盤[3)]

1)公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 リハビリテーション部

2)公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 事務部

3)公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 院長

[はじめに]当院回復期リハ病棟では、COVID-19感染対策として家族に対する直接的な介助指導を制限し、映像などを用いた間接的指導に切り替えた。その結果、間接指導は家族の介護負担感増大につながる可能性を報告した。今回、直接指導と間接指導した患者のADL能力と介護負担感の関連を検討した。

[方法]脳卒中患者83名を直接指導群、間接指導群に分類し、自宅退院後のFIM下位の食事、トイレ動作、移動項目点数とJ-ZBI_8 score合計点について相関分析を行った。

[結果]ADLとJ-ZBI_8との相関関係は直接指導群ではトイレ動作(rs=-0.48)と移動(rs=-0.54)で認められたが($p<0.05$)、間接指導群では何れの項目も認められなかった。

[考察]家族への間接的指導を実施した脳卒中患者では自立度が高くても家族の負担感が大きい症例が存在し、在宅復帰には家族への直接指導が有用と考えられた。